

「東京は神田の生まれです」の構造

福間 真由美

一、はじめに

本稿は「東京は神田の生まれです」の構造について考察するものである。

従来より、この構文は「は」の特殊な用法として注目されているが、いまだにこの構文の構造についての明確な論はない。この問題は、当然のことながら「は」の働きと密接に結びついている。そこで、まずは従来の「は」の研究成果について振り返っておきたい。

係助詞「は」の働きを論ずるものとして、注目される成果が、次の四つの概念である。

- (イ) 二分結合
- (ロ) 題目提示
- (ハ) 主題と対比
- (ニ) 取り立て

本稿でもこれらの用語を使用するため、ここでそれらの概念規定をしておく。

(イ) は尾上圭介の指摘に始まるが、概念規定については、次の半藤英明(一九九九)に従う。

「は」が上接語と述語との関係を、情報伝達上の対等な資格とするために、その直後で一度切断了た状態に置いた上で、それらを再結合する働き(七三頁)

なお、半藤は次のようにも述べている。

「二分結合」は「は」の取り立て機能を示す概念として理解されるものであり、「も」「こそ」などの係助詞には無用の概念である。(七八頁)

即ち、二分結合とは「は」が持つ機能の一つであると考えられる。

(ロ)の概念規定は、尾上圭介(一九九五)が参考となる。尾上は「題目(語)の要件」として次の①②を挙げる。

① 一文の中で、その成分が表現伝達上の前提部分という立場にある。

①—a 表現の流れにおいて、その部分が全体の中から仕切り出されて特別な位置にある。

①—b その成分は、後続の伝達主要部分の内容がそれと決定されるために必要な原理的先行固定部分である。

② その成分が、後続部分の説明対象になっている。(三一頁)

更に、尾上圭介(二〇〇二)では次のようにも述べられている。

「は」の題目提示の働きとは、文中のある項目を文全体の流れの中から仕切り出して、表現上特別な位置に立てることであるにちがいない。…題目提示とは、「は」だけの、しかもその用法の一つに過ぎない。(六三頁、

引用中の…は省略があることを表す。以下、同様)

即ち、題目提示とは「は」の一用法と位置づけられるものである。

(ハ)の「主題と対比」の概念規定のためには、あらかじめ(ニ)の「取り立て」の概念を押さえておくことが必要となるので、それらは一括して取り上げる。

取り立ての概念規定には諸説があるが、次は半藤英明(二〇〇〇)のものである。

係助詞によって文中で二項に分節された係りと結びの意味的關係を特に際立たせる(≡注目させる)ことで、主題および対比の文を作る働き(三四頁)

半藤英明(二〇〇〇)は、この取り立ての概念をより具体的に認知するための図形的モデルも提示しており、その説明として次のように述べている。

「取り立て」は、係助詞を挟んで前後する二項を他の構成要素よりも突出させて、いわば前景化(profile)して特化し、日本語の直線の構造を立体化する構造的操作として内観化する。(注10)井島正博(一九九二)

によれば、「内観的」とは「当該事態をその当事者の観点から描くこと」であり、「表現主体自身の判断・感情・評価などの言語行為」である。」この操作により、取り立てた結合の意味的注目度は上昇する。(三三八頁)

右記のような理解では、取り立ての発動により、主題と対比とが現れることになる。つまり、主題と対比は、取り立てから発する「は」の用法のバリエーションということである。

以上のようにみれば、係助詞の働きとして取り立てがあり、その中でも、特に「は」特有の機能として二分結合があり、「は」の用法としては題目提示、及び主題と対比があるが、題目提示と主題とは実質的に同じものと捉えることができる。

二、先行研究の問題点

本節では、「東京は神田の生まれです」に関わる先行研究の記述を検討してみたい。

この用法は、古くは国語調査委員会編纂（大槻文彦担任編集）による『口語法別記』（一九一六）に取り上げられている。

○「でわ」の意味のもの、

東海道村、静岡の町で、東京村、神田の大工町、
狂言記、宗論、こなたは、都わどこにござるぞ。(三五
四〜三五五頁)

注目すべきは、このような「は」を「では」の意味のものとする考え方であり、以後、このような考え方は有力なものとなる。例えば、中島文雄（一九八七）には『東京は日本橋の生まれです』も『東京の日本橋』の『東京』を取り出して強調したものと説明できる。いずれも主語ではなく、英語にすれば *is* で表されるような副詞的な構成要素である。(一一八頁)とある。諸星美智直(二〇〇〇)にも同じような認識がある。

松下大三郎(一九三〇)には、次の指摘がある。

甲「貴方は何方ですか。」乙「尾州です。」甲「尾州は何方ですか。」乙「尾州は名古屋在です。」

この「は」を「の」の意味と思つてはいけない。「は」と「の」とは非常に違ふ。甲の語中の「尾州」は單なる名詞としての「尾州」ではない。乙が「尾州です。」と云つたその判断作用の結果を表すとしての「尾州」

である。だから「尾州は」は「尾州であることは」の意である。「その尾州たらくは」の意である。(三四六頁)

ここでは、問題の「は」を「であることは」「そのくたらくは」の意味のものとしている。しかし、「東京は神田の生まれです」の「東京」は、ここでの「尾州」のように判断作用の結果を表しているとは考えられず、単なる名詞としての「東京」である。しかも、問答の答えとして成立するという考え方にも確固とした妥当性が見出しにくい。

萱野宏(一九六四)は、次のように指摘している。

〈東京は神田の生まれ〉の「は」を「の」におきかえることは許されない。…意味がちがっていて、「東京ではどこかという」と「東京では」といった意味だからである。…名詞句に「は」のついたものは、「が」「を」「に」で「時」「の」などの格を含みあるいは共にしながら、「くについていえば」、「くなら」の気持ちを提示しながら解説を呼びおこし、副詞的な句に「は」のついたものは強調提示して「そりゃ」の意味をこめる、こうまとめることができると思う。(二五五〜二五六頁・二六三頁)

ここでは、「くについていえば」「くなら」の気持ちを提示しながら解説を呼び起こすものであると論じているが、問題の「は」は上接語を提示して解説を呼び起こすもの、即ち、題目提示ではないと考えるべきではないか。問題の「は」は「くについて」述べているものではない。その点は、次に挙げる青木伶子(一九九二)に詳しく論じられており、その考えは支持し得るものである。

全体 部分

東京ハ 外神田の 神田神社の お祭り

連体修飾 連体修飾

ここでは「東京」については何らの解説もなされていない。この文は、タイトルとして記されている「神田祭り」に対する解説文である。解説の中で最も重要なのは「神田神社のお祭り(デアル)」の部分である。が、それに所在地を示す「外神田の」といふ連体修飾がついたものである。本来はこれで充分かも知れないが、東京人以外の人々にとつて「外神田」の知名度は今ひとつであるかもしれないし、又、「京都の祇園祭り、大阪の天満祭り」と有名な都市の名があげられて来た

こともあつて、「東京」が是非とも必要とされた結果の表現である。表現内容は、「東京、外神田の神田神社のお祭り」或いは「東京の外神田の神田神社のお祭り」と同じである。しかし「東京の外神田の神田神社」といふ表現における「東京」は、「神田神社」の連体修飾語である。「外神田」に対して更に連体修飾に立つてゐるから、その重みは極めて軽いと言はなければならぬ。意味から言へば、「外神田」のあり場所を示す為のものに他ならないけれども、連体修飾語としての軽さには甘んじられない。そこで題目提示用法を持つハ助詞が選ばれたのだと思はれる。意味的に内省すればノで表される関係―全体と部分の関係―以外であり得ないものを、形の上で、即ち表現の上で、恰も題目であるかの如く、重く扱つたのである。但し、この場合もハは決してノの代行をしてはゐない。(二七九―一八〇頁)

青木によれば、問題の用法は、題目提示用法を持つ「は」助詞を用いることによつて、表現上、恰も題目であるかの「ごとく」、「は」の上接語を重く扱つたものである。このような「は」の用法は、「は」の「ごとく」一般的な通常の構文とはかなり異なつてゐる。なぜ、このような用法が許されるのか、

というところが問題である。

また、野田尚史(一九九六)は、次のように述べてゐる。

「東京は神田の生まれだ。」のような文は、格関係としては「東京の神田の生まれ(であること)」と考えるのがいちばん自然である。…この型の文の「くは」は、ふつう、名詞を修飾する節の中にあり、文末までかかつていない構造になつてゐる。次の(45)でも「港区は」「高級スパー」を修飾する「港区は広尾にある」という節の中にある。

(45) こういう「おしゃれな映画」に似合う場所はどこかと思つたら、グルメの高橋幸宏がフランス料理の材料を買いに行くところは、港区は広尾にある高級スパー、明治屋。(川本三郎『雑踏の社会学』一四三頁)

このような「は」は、文の口調を整えるだけといつてもいいような、かなり特殊なものであり、限られた文体の文章にしかでてこない。(四〇―四二頁)

しかし、いくら「特殊」ではあつても、文の口調を整えるだけの用法とすることに問題はなからぬ。

最後に、竹林一志(一九九七)の指摘は次の通りである。

「東京は神田の生まれだ」型表現における「は」の前項の存在理由は何か、ということである。この問題は、同表現の「は」の前項と後項とが「全体一部分」の関係をなしていることと密接に関連している。「東京は神田の生まれだ」型表現における「は」の前項（＝全体）は後項（＝部分）よりもよく知られている（＝目立つ）要素であり、後項は前項より知られていない（＝目立たない）要素である。「東京は神田の生まれだ」型表現は、この「より知られている要素」（＝目立つ要素）を媒介とすることによって「より知られていない要素」（＝目立たない要素）を認識しやすくする表現であると見られる。同表現の「は」の前項は、後項についての理解が不十分になるのを避ける役目を担っているわけである。（五一頁）

ここでは「東京―神田」の関係から「全体一部分」の関係をつかまえているが、そのような関係がなぜ「は」で示されるのかという点は分かりにくい。

以上のように、「東京は神田の生まれです」の構造については明確な決着を見ていない現状がある。

三、構文の特徴

まずは、典型的な「は」構文について確認する。

①私は山田です。

例文①を二分結合の働きから考える。上接語「私」と述語「山田です」とは、それらの関係を情報伝達上の対等な資格とするために、「は」によって切断され、再結合されている。即ち、「は」は、「私が山田である」ことを、「私」と「山田です」の前後両項を切断、再結合することによって対等な意味の二項として結合して、一文の意味を与えているのである。このように「は」の用法においては、「は」の前後両項が明確であり、後項は文末までを含む。これに対して、「東京は神田の生まれです」型の構文はそのような認定ができない。

② 東京は神田の生まれ。（佐賀新聞〔経済〕テイータ イム 一九九八・五・一九）

例文②で二分結合の対象となる両項とはどの部分であるうか。前項部分は「東京」しかありえないが、後項部分は

判断が難しい。

この点で参考となるのが、諸星美智直(二〇〇〇)である。諸星は問題の構文について、次の指摘をしている。

(イ)「は」を介する前項と後項との関係は、専ら「大地名∨小地名」の関係の場合に使用される。

(ロ)前項と後項との大小の関係は、「道∨国」であったり「国∨郡」であったり「郡∨村」である等、相対的である。

(ハ)共起する動詞及び転成名詞等は、1移動を表す(来る・やってくる・参る…)、2出生・出身を表す(生まれ…)、3所在・存在を表す(ある…)、指定表現)語に偏っている。

(ニ)「は」を使用しない例も少なくない。

前項「東京」に対する後項が「神田の生まれ」であるとするれば、「東京」と「神田の生まれ」とは意味的關係において対等な資格として結ばれていなければならないが、そうでないことは明らかである。すると、後項は「神田」であるとしか考えられない。

③ 今回のレコーディングはアメリカはL.A。(佐賀新

聞〔文化〕今週のCDBEST10 一九九四・
六・一七)

例文③の「アメリカはL.A」の部分は例文②と同構造で、「大地名―小地名」の関係にある。しかも、例文②のように小地名の後に続く語はなく、つまり、例文③においては「アメリカ」が前項、「L.A」が後項となる。

以上のように、結論としては、例文②における「は」の前項は「大地名」である「東京」、後項は「小地名」である「神田」ということになる。「は」の二分結合の働きから考えると、この二項が対等な資格として切断・再結合されていることになる。しかし、この二項の関係性は一般的な用法における二項の関係性とは異なっている。二項が「大地名」と「小地名」であることから、通常の解釈では意味的に結びつくことに違和感が生じてしまう。即ち、その関係性は、二分結合ではないことが考えられる。

「大地名―小地名」の関係を示す「は」構文の特殊性は、「は」を使用しなくとも文が成立することである。左の具体例で確認してみたい。

④ 根っからの関西の人かと思っていたら、東京は日本橋生まれの人だった。(佐賀新聞〔総合(一面)〕

二〇〇〇・一〇・一四)

⑤ 青島氏は一九三二年東京日本橋生まれ。(佐賀新聞

「地方」二〇〇〇・一一・一七)

例文④は「東京は日本橋生まれ」、例文⑤は「東京日本橋生まれ」である。即ち、例文④と例文⑤とは全く同じ情報価値であり、これは、例文④の型は「は」を使用しなくとも成立するということを示している。なぜ「は」を使用せずとも成立するのかといえば、それは「大地名—小地名」の関係が極めて当然の関係として理解されるからであり、最も理解しやすい語順だからであると考えられる。「大地名—小地名」の関係はすべての人に共通する客観的な視点から成り立っており、世の中の常識に基づいたはつきりと明確な意味類縁である。

つまり、「東京は神田の生まれです」の構文は、「東京神田の生まれです」を「は」構文として作りかえたものと考えられるのだが、「は」構文にするからには何らかの効果を狙ったものと捉えるのが自然であろう。それならば、「東京は神田の生まれです」型の「東京は神田」の二項はどのような意図のもとに結び付けられているのであろうか。この点を次節で考察する。

四、「東京は神田」の結合

次例は「東京は神田の生まれです」型の類例である。

⑥ 東京は深川に生まれた柳家三亀松である。(佐賀新聞「文化」書評 二〇〇〇・七・一六)

⑦ 北海道は札幌でのお話。(佐賀新聞「ひろば」甘くち辛くち 二〇〇〇・二・二二)

⑧ 東京は芝・青松寺に納める四天王像である。(熊本日日新聞『読書books』ページの向こう) 二〇〇二・六・二三)

⑨ 中国は青島(チンタオ)仕込みの一口大のギョーザがおいしかった。(熊本日日新聞「エッセー気分」 二〇〇二・六・三)

四例とも、例文⑥「東京深川」、例文⑦「北海道札幌」、例文⑧「東京芝・青松寺」、例文⑨「中国青島」のように、「は」を介さずに結ばれることが可能である。これらの構文において表したいのは、一つの地域を示すことであると考えられる。前項に対して後項を示すという関係ではなく、初めから意味的に同質(地域名という点で)の二項によって一地域を表そうとするものである。例文⑥でいえば「東

京」の後項として「日本橋」も「神田」も「下町」も「深川」もあるがその中において「深川」を選んでいっているという関係ではない。生まれた場所を表すのであれば、その場所とは選択するまでもなく「深川」しかないのである。「深川」出身であることが決定づけられている中で、「深川」が「東京」にあるために「東京」と「深川」が並列する。つまり後項の「小地名」が、文中で表したい一地域として定まっております。前項の「大地名」が選択される形である。「東京は神田の生まれです」型は基本的にその形にあるのではない。諸星美智直(二〇〇〇)の指摘にある、前掲(イ)の(三)は、そのような結果として特徴づけられるものだと考える。

そのような関係性の中で、「東京は神田」「東京は深川」の「は」がどのような働きをしているのか。その有力な考え方として、尾上圭介(二〇〇二)を取り上げる。

けれども、「AはB」がそのような意味の断続を帯びるのは題目—解説関係にある場合だけなのであって、現代語の「は」の用法は「題目提示」と「対比」(両者がひとつの用例において重なることもある)の二つにほぼ限られるが、古代語の「は」にはそのいずれとも言いがたい用例がかなり多数あり、したがってそれは

現代語に訳したときに「は」が現れない例であるが、その場合も上記のような断続は感じられない。(七一頁)

右は、古代語の「は」の用法では題目提示と対比の二つ以外に、そのいずれとも言いがたい用法があるというものである。古代語の用例としては、次例が挙がる。

- 「み吉野の耳我の嶺に時なくそ雪は降りける 間なくそ雨は降りける」(万葉二五)
- 「田子の浦ゆうち出でて見ればま白にそ富士の高嶺に雪は降りける」(万葉三二八)
- 「天離る鄙にも月は照れれども妹そ遠くは別れ来にける」(万葉三六九八)
- 「ますらをと思へる我をかくばかり恋せしむるは悪しくはありけり」(万葉三五八四)
- 「時守の打ち鳴す鼓数みみれば時にはなりぬ逢はなくも怪し」(万葉二六四二)
- 「燃ゆる火も取りて包みて袋には入るといはずやも智男雲」(万葉一六〇)
- 「我のみそ君には恋ふる我が背子が恋ふと言ふことは言のなぐさそ」(万葉六五六)
- 「人皆は萩を秋というよし我は尾花が末を秋とは言

はむ」(万葉二二一〇)

現代語の用例としては、次のような詩的表現が挙げられている。

○「飲んで騒いで丘にのぼればはるかクナシリに白夜は明ける」

○「雨は降る降る城が島の磯に利休鼠の雨が降る」

尾上によれば、それらは、『題目提示』でも『対比』でもなく、『事態の強調的承認』でも呼ぶより仕方のない用例群であつて、…ほとんどの場合その『AはB』が文の全体ではなく一部分であることからもうかがえるとおり、『AはB』は緊密な一体であつてその中間に断は感じられないのである。(七二頁)と考察される。

尾上の挙げた用例は、「東京は神田の生まれです」の類例とは違ったものではあるが、そこから導かれた論は「東京は神田」の「は」にも当てはまるものであるといえる。

「東京は神田」型の「は」が題目提示ではないことはすでに述べたとおりである。また「東京は神田」は「大地名—小地名」の關係として初めから結びつきが固定的な二項であり、他に特定の対立軌を持つことのないものである。

つまり、「小地名」である「神田」に適合する「大地名」の「東京」からなる「東京・神田」、そこから生まれる「東京は神田」は完成された情報であり、余分な情報はないのである。したがつて対比の用法ともならない。つまり、題目提示でも対比でもない用法である。典型的な「は」の構文では次掲のような論が成り立つが、「東京は神田」型には適できないのである。

「鯨は哺乳動物だ」という文は、問題になっているのが「鯨」だから説明部分が「哺乳動物」となるのであつて、「鯨」でなく例えは「いわし」だったならもはや「哺乳動物」とは言えないという關係を表すものである。すなわち、題目項は解説部分がそれであるための原理的先行固定部分なのであつた。「AがAでなかったらBと結びつくかどうかかわからない」という環境の中でAとBの結合の成立を承成することは、分説的承認である。Aと並ぶ様々な前項候補とBと並ぶ様々な後項候補との無数の結合の可能性をよそに見つ、その中から「A—B」結合だけを唯一に取り出して承認するということは、「なんらかの意味でその事態と対立的な關係にある環境を意識しつつ、この一つの事態の成立を承認する」という分説的承認にほかならない。(七

右の記述にもあるとおり、題目提示においては前項を先に固定して後項を続ける形をとる。前項と後項の間には切断・再結合の「断」が感じられる。しかし「東京は神田」型は、繰り返し述べている通り、前項に対して後項が示されるという関係ではなく、初めから意味的に同質（地域名という点で）の二項によって一地域を表そうとするものである。後項の「小地名」は、文中で表したい一地域として定まっておき、その上で前項の「大地名」が選択される形であるために、二項間に題目提示におけるような「断」が生まれないのである。即ち、「東京は神田」型の「は」は、右記の「分説的承認」ではなく、前掲の「事態の強調的承認」に相当するものであると考えられる。

このように、「東京は神田」型の用法は、題目提示でも対比でもない別の用法であり、しかも二分結合の概念からも外れた用法である。そうだとすれば、この用法の「は」の前項と後項はどのような形で結びつくものであろうか。ここに有効な概念が取り立てである。取り立ての概念は、第一節にも掲げたが、「係助詞を挟んで前後する二項を他の構成要素よりも突出させて、いわば前景化 (profile) して特化し、日本語の直線の構造を立体化する構造的操作として

内観化する。」というものである。「東京は神田」型による「は」の前後両項は、意味的に同質（地域名という点で）のものが一体的に結びついており、しかも「は」の構文をとることで、情報的な注目度を上げることが考えられる。このようなことは「は」に取り立ての働きがなければ成しえないことであると考えられる。つまり、本稿の考え方によれば、「は」に取り立ての働きがあればこそ、「東京は神田」型の用法が発生するということである。

以上、「東京は神田」型の「は」が、「は」の働きとして内包されるものであることを述べた。次節では「東京は神田の生まれです」の全体構造について説明する。

五、「東京は神田の生まれです」の全体構造

直接の考察対象であった「東京は神田の生まれです」において、一番重要な情報は「神田出身である」ことである。つまり「神田出身である」ことが伝えるべき核である。それを補う形で、「は」構文としては変則的なものになるが、前項の部分に「大地名」を配置して、右の構文が出来上がる。こうしてできた「大地名は小地名」の構造は題目提示の用法でもなく対比の用法でもない。それは「事態の強調

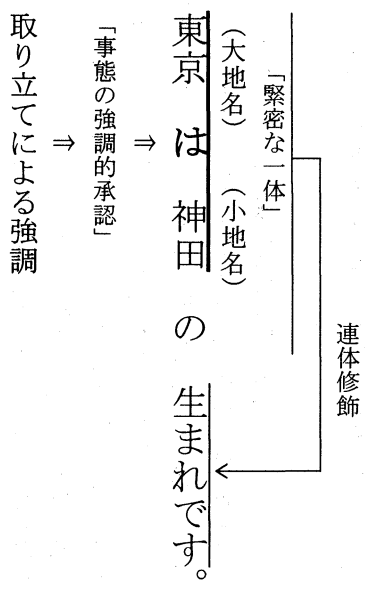
的承認」とでも言うべき、いわば「第三」の用法である。しかし、この「第三」の用法も「は」の取り立ての働きであることはまぎれもない。

「東京は神田の生まれです」の場合、一番重要な伝えたい内容の焦点は「神田出身である」ことであるが、それだけでは情報が不十分な場合、例えば「神田」がどの地域であるのか判断することが難しければ、「大地名」である「東京」がどうしても必要となる。すると、話し手は「東京・神田」という情報を示すことが必要となるが、そのような地名の並列では情報の重みが軽くなるを得ない。そこで、「大地名・小地名」という並列に「は」を介することに よって特別の効果を生もうとする。それは、「は」の取り立ての働きによって「東京」と「神田」を特別な情報として扱うということである。取り立てによって結ばれた「AはB」は「緊密な一体」として文全体から浮かび上がり、際立つことになる。その効果が「東京・神田」という単なる並列との大きな違いである。情報内容的には何ら変わりなくとも、伝え方という点において「AはB」即ち「東京は神田」の形は強調的なのだと考えられる。

このように「東京は神田の生まれです」は、「は」の取り立ての働きによって「東京は神田」の部分文全体から浮かび上がらせ、際立たせている。そのことにより、その部

分はその後の「生まれです」の連体修飾句でありながらも、特に注目度の高いものとなることに成功している。つまり「大地名は小地名」という結びつきは、その情報を強く印象付ける効果があるのである。そのため、この型の構文は、出身や所在、存在等、特に地域情報と関わる形で類例を広げるものと考えられる。

まとめに、「東京は神田の生まれです」の文構造を示せば、次の図のようになる。



参考・引用文献

青木 伶子(一九九二)『現代語助詞「は」の構文論的研究』笠間書院

尾上 圭介(一九八二)『「は」の係助詞性と表現的機能』『国語と国文学』第五八卷第五号

尾上 圭介(一九九五)『「は」の意味分化の論理―題目提示と対比』『言語』第二四卷第一一―号

尾上 圭介(二〇〇二)『係助詞の二種』『国語と国文学』第七九卷第八号

萱野 宏(一九六四)『口語文法講座三ゆれている文法』明治書院

国語調査委員会編纂(大槻文彦担任編集)
(一九一六)『口語法別記』文部省(福島邦道解説)『口語法・同別記』が昭和五五年五月に勉強社より刊)

竹林 一志(一九九九)『助詞「は」の一用法について―『東京は神田の生まれだ』型表現の特徴―』『国語学会平成九年度秋季大会要旨』

中島 文雄(一九八七)『日本語の構造』(岩波新書) 岩波書店

野田 尚史(一九九六)『「は」と「が」くろしお出版

半藤 英明(一九九八)『取り立て』から見た係助詞と副助詞』『成蹊國文』第三十一号

半藤 英明(一九九九)『二分結合』をめぐる『は・も・こそ』と『が』『静岡英和女学院短期大学紀要』第三十一号

半藤 英明(二〇〇〇)『取り立て』の図形的モデル』『静岡英和女学院短期大学紀要』第三十二号

松下大三郎(一九三〇)『標準日本口語法』中文館書店(徳田正信編)『増補校訂標準口日本語法』が昭和五二年四月に勉強社より刊)

諸星美智直(二〇〇〇)『現代語における助詞「は」の特殊な用法―『上州は新田郡三日月村の生まれ』をめぐる―』『国語研究(国学院大学)』六三